



真・善・美

<https://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizuchu/>

附中だより

令和3年11月10日

TEL 054-255-0137

『附中創り』 ～若人よ 眉あげて 新しき 文化創らん～

文責 指導部長 勝又 悠太

本校の体育祭は、前年度に体育祭特別委員長（体特長）が選出され、4月に「体育祭基本方針」「体育祭具体的施策案」を中央委員会や総会で議論します。総会で承認されると、各学級で体育祭特別委員の選挙、各団体の団長や企画長の選挙、「種目案」の検討、各係で割り振られた仕事内容の分担、総練習などを経て実施に至ります。10月29日の当日を迎えるために、長い時間をかけて創りあげられるのが本校の体育祭です。そのため、同じ体育祭はなく、その年ならではの附中生の思いがこもった体育祭となるわけです。



体育祭の開会式での小泉剛愼生徒会長の言葉を紹介します。
「正直、実施形態に関しては、今年の体育祭は満足のいくのものではないかもしれません。しかし、附中生は、体特を中心に眉を上げて試行錯誤し、新しい形を創造し模索してきました。自主独立や自由という気風も体育祭という行事を通して守っていくことはできていると思います。～中略～その中で、来年度の行事を創っていく1、2年生が、この体育祭を「伝統」と「変化」について考えるよい機会にしてくれるとよいなとも思います。」（一部抜粋）

生徒会長の言葉にも創るという言葉が語られているように、本校の子どもたちは様々な場面で『附中創り』という言葉を用います。なぜ、そのような言葉が用いられているのでしょうか。私が考えるに、学校の主役は私たちだ！という気概が一人一人に根付いているからだと感じています。言い換えると、本校の子どもたちはただ学校に通っているのではなく、3年間の附中生活を存分に使って、学校創りに参加しているのだと言えます。新たな仲間を迎えたり、立場を変えたりしながら、その時の附中生がその時の附中を創りあげているのでしょう。だからこそ、先輩たちが創りあげてきた「伝統」を重んじつつも、「変化」を恐れずに、子どもたちが主体となり、よりよい学校求め続けているのだと考えます。

そして、『附中創り』は一人ではできないことを子どもたちは知っています。先輩たちの創りあげてきた附中を引き継いでいくことは一筋縄ではいかないことも知っています。そのため、附中生は仲間と顔をぐっと付き合わせながら語り合い、その年ならではの文化を創っていくことを真剣に楽しめるのでしょう。このような姿が至る所で見られるよう、子どもたちを育てていきたいと思っています。

